

ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ③

◆2023年02月24日 日刊ペリタ

「ミャンマー外交から撤退しろ！」

在日ミャンマー人が日本財団前で抗議デモを実施



「日本財団の笹川会長は今すぐミャンマー外交から退くべきだ!」。日本財団の笹川陽平会長に対し、「ミャンマー外交」からの撤退を求める抗議デモが22日、日本財団ビル前（港区）で実施された。主催は、在日ミャンマー人コミュニティ。

独自の“ミャンマー外交”を進める笹川会長（ミャンマー国民和解担当日本政府代表）に対する在日ミャンマー人の怒りの声が平日昼間のオフィス街に響き渡った。

日本財団ビル前に集まったおよそ70人の在日ミャンマー人らは、「暴力ミャンマー軍への支援をやめろ」、「ミャンマーの平和を妨害する内政干渉をやめろ」などと抗議の声を上げた。

抗議デモに参加した在日ミャンマー人女性は「笹川会長は『ミャンマーの平和のため』という名目で色々なことをやっているが、本当にそれはミャンマーのためになっているのでしょうか」と疑問を呈す。その上で「もし本当にミャンマーのために何かしたいのであれば、ミャンマー国軍による総選挙をやめさせてください」と訴えた。

また、ミャンマー支援に取り組む日本の大学院生は「日本財団が標榜している『世界平和』のために何が正しいのか、しっかりと考え直してもらいたい」と語った。

◆2023年02月23日 日刊ペリタ

麻生副総裁らへのミャンマー国軍トップの叙勲、 岸田首相「事実認識していない」

日本ミャンマー協会の渡邊秀央会長（元郵政相）と自民党の麻生太郎副総裁（同協会最高顧問、元首相・財務相）がミャンマー国軍のミンアウンフライン総司令官から叙勲されたことが、22日の衆院予算委員会で取り上げられた。立憲民主党の源馬謙太郎議員の質問に対して、岸田文雄首相は「政府としてその事実を認識しておらず、従って答弁を控えたい」と答えた。同議員は、バゴ橋建設事業で日本の政府開発援助（ODA）資金が国軍系企業に流れ

ているとされる問題についても政府の見解を質したが、納得のいく説明は得られなかった。（永井浩）

渡邊、麻生の両氏は、ミャンマー国軍の最高意思決定機関である国家統治評議会の議長を務めるミンアウンフライン総司令官から、同国の発展と繁栄、平和構築に貢献したとして名誉称号と勲章を授与された。21日の国営紙グローバル・ニューライト・オブ・ミャンマーによると、麻生氏は式典に出席せ

ず、渡邊氏が自身と麻生氏の称号と勲章を受け取った。渡邊氏はスピーチで、両国の友好関係のさらなる促進に貢献していきたいと話した。麻生氏は渡邊氏を通じて、総司令官に感謝の意を表明した。

▽「ODAが国軍の資金源に」

バゴ橋建設をめぐる質疑は以下のとおり。

源馬議員：我が国の税金がミャンマーの軍系企業に流れているという問題。バゴ橋建設事業の資材調達等は総額 700 億円程度の ODA で、2022 年 7 月から 2023 年 1 月にかけて約 200 万ドル (2.6 億円) が一次コントラクターの日系企業の Y 社 (注) から、軍保有企業の MEC (ミャンマーエコノミック・コーポレーション) に支払われ、国軍の資金源になっているが、その原資は当然日本国民の税金である。MEC は EU、米国、英国などからの制裁対象だがそのミャンマー国軍保有企業に日本の税金が流れていることをどう考えるか。

岸田首相：主契約企業とその下請けである MEC との間で締結された契約上、解約には多額の違約金が生じる。従って国軍系企業の MEC への支払いは最小限に留めることにしたい。

源馬：では違約金はいくらなのか政府は把握しているのか。

林外相：手元に資料がないので後日確認して報告する。

源馬：外務省に確認したら、契約内容自体を把握しておらず、従って違約金が発生するか承知していないという回答だった。

林：主契約企業 (Y 社) から多額の違約金がかかるという話だった。

源馬：それなら相手が言ってきたことをそのまま鵜呑みすることで、政府として契約内容をしっかり把握して、対応を再検討すべきではないか。

岸田：実態を把握したうえで適切に対処すべきだと考える。

源馬：一方でロシアに制裁を加えながら、ミャンマー国軍には資金支援しているのでは国際社会からどう理解を得られない。

(注) 源馬議員は企業名を伏せているが、国際人権団体・ヒューマンライツウォッチは「横河ブリッジ」と明らかにしている。

◆2023 年 02 月 21 日 日刊ベリタ

ミャンマー国軍トップが日本ミャンマー協会の渡邊会長と自民党の麻生副総裁を表彰 「貢献」称え

ミャンマー軍評議会トップのミンアウンフライン国軍総司令官は 20 日、日本ミャンマー協会の渡邊秀央会長と自民党の麻生太郎副総裁 (同協会最高顧問) をミャンマーの発展と平和に貢献したとして表彰した。国営メディアの報道をミャンマー・ジャポンが伝えた。欧米諸国はじめ国際社会が国軍をきびしく批判し、制裁を強化しているなかで、日本の有力政治家らが国軍から表彰されるのはなぜなのか。

(永井浩)

首都ネピドーで開かれた式典には渡邊会長が出席し、両国のさらなる友好関係に尽力したいとの考えを示した。麻生氏は式典に参加しなかった。

▽「貢献」の中身

では、両氏のミャンマーへの「貢献」とは何を意味するのか。

渡邊会長は中曽根政権の郵政相をつとめた元自民党政治家。2011 年の民政移管後にテインセイン政権が打ち出した最大都市ヤンゴン郊外のティラワ経済特区の開発に巨額の政府開発援助 (ODA) を供与する政策で辣腕をふるった。これを機にミンアウンフラインら国軍トップとの関係を深め、2021 年の国軍クーデターまでに総司令官と 20 回以上会っている。またミンアウンフライン司令官の 2014 年の初来日に日本財団の笹川陽平会長とともに尽力した。

ティラワ開発を突破口に、ミャンマーを「アジア最後のフロンティア」とする日本の官民挙げた経済進出が加速した。2013年にティラワ経済特区を訪問した安倍晋三首相は、「ティラワ開発は日本とミャンマーの協力の象徴で、日本政府も全面支援を惜しまない」と述べた。

日本企業の進出の窓口として大きな役割を果たしたのが、日本ミャンマー協会である。最高顧問の麻生太郎副首相・財務相を筆頭に、政官財のそうそうたるお歴々が名を連ねている。副会長には大手商社の三菱商事、丸紅、住友商事の元トップ、理事には自民、公明、立憲民主の与野党の現・元衆参国會議員、関係省庁の事務次官経験者、大手企業の役員らがずらりと並ぶ。顧問は歴代の駐ミャンマー大使。正会員（2021年3月現在）は日本を代表する大手企業127社。協会はまさにオールジャパン、日本株式会社の縮図といえる。

会員各社は同協会をつうじてミャンマー側とのODAビジネスだけでなくさまざまな経済進出の便宜を図ってもらうが、合併の相手は国軍系企業がほとんどである。

政府も、日本の新たな海外市場開拓に貢献してくれる協会会長の渡邊の意向に逆らえない。

こうした日本政府と経済界の国軍との関係について、朝日新聞（2021年8月23日）は、「ミャンマーはワタナベだ」という見出しの記事でこう報じている。麻生財務相は6月初旬にロンドンで開催された主要7か国（G7）財務相会合で、ミャンマー情勢が話題になると機先を制してこう発言した。「日本にはミンアウンフラインとじかに話せるワタナベという男がいる。ミャンマー政策は日本に任せておけばいい」

記事は、日本政府が対ミャンマー外交で「国軍と独自のパイプを持っている」と国際社会にアピールし、制裁を強める欧米と一線を画すために繰り返してきた「独自パイプ」の一人とされるのが渡邊だと書き、外務省関係者の話を紹介している。「国軍に食い込み、政府が手を出せないようなところに入り込んでいる。軍関連の情報を得るための重要人物」なのだ。

クーデターから一週間後の2月8日、渡邊はミンアウンフラインと会談した。国軍総司令官は「やむ

を得なかった。理解してください」と言ったという。渡邊は朝日との一問一答で、クーデター首謀者を擁護し、「クーデターではない」「司令官は民主主義をよく勉強している」と述べている。自分が「独自パイプ」と言われることについて、こう説明している。「個人でうごいてきたわけではない。2013年に当時の安倍晋三首相、麻生太郎副総理の二人と今後のミャンマーについて話し合い、国軍との交流は私が進めることになった」

▽「日本は国軍と手を切れ」

こうした日本とミャンマー国軍との関係、すなわち同国への最大のODAの供与国である日本から、これに関連して多数の企業が進出し、日本の政府、経済界はミャンマー国軍と深くむすびつき、両方で経済的利益を分かち合っていることが「貢献」なのだ。またその利益の一部が、私たちの豊かな生活をささえている。いいかえれば、「平和国家」日本には、民意を反映しない独裁者たちの手で流されたアジアの隣人たちの血の匂いが潜んでいる。だから、民主化支援をもとめる圧倒的多数のミャンマー国民は、「日本は国軍と手を切れ」と訴える。

クーデターから2ヶ月後の4月1日、東京の外務省前の集会で、祖国の民主主義の回復をもとめる在日ミャンマー人たちは、「日本のお金で人殺しをさせないで」「国軍に流れる公的資金を止めて」と訴えた。「日本のお金による人殺し」とは、日本の官民連合のODAビジネスが国軍のふところを潤してきたという実態が、クーデター後に明らかになってきたことを指している。

ミャンマー人らはODAビジネスの本丸といえる日本ミャンマー協会にも何度か、「国軍系企業との連携をただちにやめろ」と訴える抗議行動を行ってきた。

日本は、クーデターに反対し民主主義を守れと立ち上がった広範なミャンマー国民に血なまぐさい武力弾圧の手をゆるめない国軍に、直接手を貸しているわけではない。しかし、国内外のミャンマー人から見ると、最大のODA供与国である日本の公的資金がさまざまな形で国軍に流れていることははっきりしている。日本政府は間接的に軍政の残虐行為に加担している、と映る。

こうしたミャンマー人たちの訴えに呼応して、日本の市民団体も日本政府の対ミャンマー政策の見直しをもとめている。クーデターから2年にあたる2月1日に、NGO5団体が、共同声明「日本政府は対ミャンマー政策の再構築を！」を政府に提出した。しかし政府は、新規ODAは停止したものの、既

存のODAは継続している。そして、そのODAとそれにかからむ国軍とのビジネスに大きな役割を果たしてきた日本の有力政治家らが「ミャンマーの発展と平和に貢献した」として、クーデターの首謀者から表彰され、「両国のさらなる友好関係に尽力したい」との考えを示したのである。

◆2023年02月07日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（10）

ヤンゴンの平和は終わった

西方 浩実

（2年前の2021年）2月25日。ヤンゴンの平和は終わった。ヤンゴン中心部のスレーパゴダ周辺には、朝から「軍支持者」たちが集った。軍の支持者なんて本当にいるのか、と驚く私に、友人は「まあね。軍人の家族や親類縁者、あとは軍に味方することで利益を得ている人たちだよ。でも今日集まっている人たちの多くは、軍に買収された貧しい人だ」と説明する。参加者には5000チャット（約380円）が支払われているのだという。「日雇い労働だよ。いつもの軍のやり方だ」と友人はため息をつく。

▽乾いた銃声、叫び声、逃げ惑う人びと

スレーパゴダ前的大通りは、今回の抗議デモはもちろん、過去にも民主化運動の中心地になってきた場所だ。そのため、市民の抗議運動の盛り上がりを警戒した軍側は、2月半ばからスレーパゴダ周辺にバリケードを張って、抗議デモができないように封鎖していた。しかし彼らはこの日、軍支持者たちから成るデモ隊を、バリケードを動かしてあっさり招き入れ、彼らを脇から警護した。（警護などしなくても、市民は武器など持っていないのだが。）

市民たちはバリケードの外側の歩道に立ち、頭上で両手をクロスさせて、反軍政の意思を示す。周囲からは、魔物を追い払うための鍋の音が響く。

その軍支持者の集団には、あろうことか破壊分子が潜んでいた。男たちは大ぶりのナイフや棒を振り回し、スリングショット（ゴム製のパチンコ）を引いた。抵抗する間もなく刺された人もいた。それでも市民たちは、やり返さなかった。破壊

分子が暴れ出したのは、自分たちへの挑発だとわかってきたからだ。軍はそうして市民の間に争いを起こし、頃合いを見計らって、「治安維持」のために「暴徒を鎮圧」するのだ。同じく、棒を持った集団が現れたヤンゴン中央駅では、女性や子どもが、誰も連れて行かれないように、腕を絡めて人の鎖をつくったという。

破壊分子たちの様子は、すぐに画像としてFacebookに拡散された。ナイフを振り回す男の耳にはイヤフォンが写っている。「誰か」から指示を受けているのだという憶測が飛び交う。

夕方にはヤンゴンの別の地域で、ついに警官隊が市民に向けて銃を撃った。発端は、その地区の首長が、軍から指名された人に交代したことを、住民が「受け入れない」と意思表示したこと。これを許さない軍側は、警官隊の前でシュプレヒコールをあげ続ける住民を、銃で押さえ込んだのだ。

住民らが逃げながら配信する動画から聞こえる、乾いた銃声。叫び声。逃げ惑う人々。カメラの映像が乱れ、途切れる。混乱は夜まで続き、一部の市民はビルの中に囲い込まれた。何十人か拘束されたらしいが、もう、あとはわからない。自分を守るために、インターネットの画面を閉じる。とうとうヤンゴンもこうなってしまったんだ・・・がっくりとうなだれる。これが、国軍がクーデターで達成したかった「民主主義」か。反吐が出る。

ヤンゴンでの銃撃を知り電話をかけてきた、地方在住の30代の友人は、軍政への怒りを熱っぽく語ったあと、ふと口調を緩めて言った。「But,

unfortunately, I was born in this country. (でも、僕は不運にも、この国で生まれてしまったんだ)」

Unfortunately (不運にも)という言葉に、どうしようもなく切なくなる。母国に生まれたことを「不運」と嘆くことの、悲しさ。誰だって、自分が生まれ育った国を嫌いになんかなりたくない。だけど私も「そんなことないよ」と咄嗟に言えなかった。もう言えなくなってしまった。

母国への誇りを失ったミャンマー人の心は、どれだけ傷ついているんだろう。国軍には、ほんのわずかでも、それが見えているだろうか。

▽無差別虐殺

2月28日。クーデターから明日で1ヶ月。軍や警察がいつ市民を弾圧するか、とずっと怯えてきた。でも「弾圧」という表現は甘かった。これはもはや、無差別の虐殺だ。スマホに次々にアップされる、悲惨な画像や動画。これはいつ?どこで?と必死で情報を追いかけても、何ができるわけでもない。だけど、目を背けてはいけない気がする。

無抵抗の市民が、銃で撃たれて倒れる。鳴り止まない銃声の中、ジャバジャバと血の流れ出す仲間の身体を4人がかりで抱え、少年たちが必死で走る。自分たちも撃たれるかもしれない。でも、仲間の身体が軍の手に渡ってしまえば、二度と返ってこないかもしれない。(事実、マンダレーで銃撃後に軍の病院に收容された男性の遺体を、軍は「コロナに感染していた」として、家族の元に返さなかった。)

警察は、市民を警棒で殴り倒す。意識を失ったように見えるその人を、さらに棒で突き、殴る。抵抗なんてしていないのに、ただ痛めつけるために殴るのだ。デモをする医学生たちの周囲をかこんで追い詰め、白衣を剥ぎ取って次々と護送車に押し込む。女性の髪を引っ張り、男性を羽交い締めにして殴る。エスカレートする暴力。信じられない、どうして、どうして、とパソコンの画面を見ながらオロオロする。

市民は、ドラム缶を切ったような手作りの盾を持ち、警察隊と対峙する。飛んでくる催涙弾を打ち返すために、テニスラケットを手にする人もいる。多くの人が、ヘルメットやゴーグルをつけている。カバンを前で抱えている人は、防弾チョッキの代わり

だろうか。

武器など何ひとつ持っていない。ただ撃たれたら逃げ、逃げた先でまた叫び声を上げるのだ。

でも、そもそもなぜ彼らは撃たれているんだろう。軍政は嫌だ、と意見を言ったから?

5人以上で集まっているから?

それは、殺されるほどの重罪ですか?

私の自宅周囲もバリケードで囲まれた。地域住民が、軍や警察が入ってこられないように、道路を塞いでいるのだ。アパート前の道には、ゴミ収集箱や店の看板、机や椅子などが積み上げられ、その前後には割れたコンクリートブロックや石などがまきびしのように置かれている。道路に貼り付けられた無数のミアウンフライン軍総司令官の顔写真は、兵士や警官の、国軍総司令官の顔写真を踏みつけることへの躊躇を利用した心理的なバリケードだ。

アパートの前で、複雑な気持ちでバリケードを見つめていると、セキュリティのおじさんに声をかけられる。「ジャパニーズ (=私)、今日は危ない。家で過ごした方がいい」。いつも笑顔で陽気なおじさんの、真剣な眼差し。

自宅に帰ってぼんやりしていると、少し遠くでパァン!と乾いた銃声が響く。軍が来た、とハッとす。急いでパソコンを開き、誰かがFacebookでライブ配信していないか探す。あった。私の通勤路が映っている。いつも屋台が並び、客待ちのタクシーがたむろしている場所だ。でも今この画面上では、同じ道路上に白煙が上がり、まるで戦争のように、ヘルメットをかぶった人々が大声で叫び、逃げ惑っている。

・・・え、なにこれ。今?そこで?うそでしょ?頭ではわかっているのに、事態を飲み込めない。いつもの穏やかな風景とのあまりの落差に、何が現実か認識できなくなる。

ライブ映像が切り替わる。カメラは別の街角で、バリケードを築いて防戦するデモ隊の姿を捉える。そのへんの看板や机やタイヤなどを、みんなで協力して積み上げる。バリケードの手前で、デモ隊は、声を合わせて反軍政のシュプレヒコールを繰り返す。視線の先には、銃を持った警官隊が横一列で盾を構えている。

一触即発の状況で、デモ隊の最前列にいる青年にインタビューを敢行するメディア。緊迫した空気の中、青年はひとつひとつ真面目に質問に答える。Facebook ライブのコメント欄には、彼らの無事を祈る言葉が秒単位で投稿され続ける。

その中に「暴力で返さないで。僕らのたたかいを、世界に見てもらおう」という投稿。

市民たちもわかっているのだ。彼らがどれだけ声を枯らして叫んでも、それで軍政が倒れるわけではないことを。でもその姿を見た人が、その声を聞いた人が、自分たちの代わりにきっと何とかしてくれる。それを信じて、命を賭けているのだ。本当に、

どうか世界に見てほしい。そして誰か、どうかして彼らを守ってくれ……。

バリケードの向こうで、警察が動き出す。銃を構える。心が悲鳴を上げる。やめて！撃たないで！

その夜は、軍に拘束される夢を見た。ああ日本人なのに捕まってしまった、大使館や外務省に迷惑をかける、名前や勤務先も報道されてしまうだろうか……そんな小さなことを気にしている自分に、夢の中で腹を立てている夢だった。

◆2023年02月09日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(11)

「恐怖からの自由」(アウンサンスーチー)を胸に

西方 浩実

2月28日は、ヤンゴンだけでなく、ミャンマー中で同じようなことが起きていた。電話をかけてきた地方在住の友人は、悔しさを訴えるように、上ずった声で言った。「警察と兵士は、非暴力のデモ隊にいきなり催涙弾を撃ったんだ。撃つぞ、なんて一言も言わなかった！」

そして数名のデモ参加者が拘束されたという。武器も持たず、ただ声をあげただけの市民が、一体どんな罪を犯したというのだろう。「警察は、拘束した人たちを夕方5時に解放すると約束した。だから家族や友達は警察の前に集まって解放されるのを待っていたんだ。でも解放なんてされなかった。それどころか、警察は待っている人たちを怒鳴り、威嚇射撃をして、さらに何人も拘束したんだ。」

「僕は今、血液が煮えるほど怒っている。でも正直、もう心が消耗しきってしまった……。これ以上はもう言葉にできないよ」。彼はため息交じりにそう言うと、電話口でじっと黙り込んだ。

たくさんの罪のない市民が、殺された。(18人死亡、という海外向けの報道は、地元メディアのものと比較すると少ない(注1)翌日には、遺された人たちの姿がFacebookで拡散された。息子をなぜデモに行かせてしまったのかと、狂ったように泣き叫ぶ母親。もう二度と会えない父親の遺影を片手に、わ

けもわからず泣きじゃくる小さな息子。ずっと愛してるよ、と2人で撮ったセルフィーを投稿し続ける恋人。

「00人が死亡」というセンセーショナルな数字は、もはや意味をなさない。殺された一人ひとりに人生があり、大切な人がいた。せめて、あの人はこの素晴らしい民主国家をつくるために犠牲になったのだ、と遺された人が胸を張れるようなミャンマーになりますように。

それでも、3月1日も、2日も。窓の外からはデモの声が聞こえてくる。

28日に比べたら規模は小さいが、それでもかなりの人数だ。人々の悲しみや怒りが、絶対に軍政を受け入れないという決意に変わっているように感じる。なんて勇敢な人たちだろう……。

この勇敢さを支える一つの要因は、アウンサンスーチー氏が貫いてきた信念だ。アウンサンスーチー氏は、NLD党を設立した当初(1988年)から「国民が同意しないすべての命令と権力に、義務として反抗しよう」と、まさに不服従をスローガンに掲げてきた。

また、真の自由とは「心の中の恐怖からの自由(Freedom From Fear)」だとして、恐怖によって「自国の囚人」にならないように、と一貫して語り続け

た。今、命がけでデモに参加している若者、Generation Zたちは、民主化以降ようやく解禁されたアウンサンスーチー氏の本を読み、その言葉を浴びて育ってきた最初の世代なのだ。

デモ隊の装備はますます本格化している。最前線に立つ若者たちは、ガスマスクをつけたり、金属の板を首にかけて胸の前に吊るしたりして、このメチャクチャな武力行使を生き延びようとしている。盾には「PEOPLE」の文字。警官隊の盾に「POLICE」と書かれていることに対抗して、我々はミャンマーの人々とともにここに立っているのだと、無言でアピールしているのだろう。

中には、盾が足りないのか、衛星放送の丸いアンテナを構えている人もいる。雨傘を広げて、向こう側から自分たちの姿を隠す様子もある。消火器を抱えている人は、銃撃された時に、頭部を狙い撃ちされないように煙幕を張る役目だ。アンテナや傘や消火器など、日常風景の中にあっただものが、防具として使われている現実に、何ともやるせない気持ちになる。

仏教徒の多いミャンマーならではの抵抗手段もある。僧侶が托鉢をするときに持つ黒い器を、上下逆さにして頭上に掲げるポーズだ。普段、人々は托鉢僧へのお布施や食べ物をこの器に入れ、功德を積む。これを逆さにすることは「お前たちに功德など積ませない」という意味を持つそうで、これは、日々の功德を積むことで来世の幸せを願う仏教徒にとって、大きな心理的なダメージとなる。

デモ隊の足元には、水の入ったビニル袋が積み重なっている。警察や軍に催涙弾を撃ちこまれたら、デモ隊は逃げながら、このビニル袋を催涙弾に向かって投げつけるのだ。アパートの上層階に住む住民たちも、水を含ませた毛布を路上に投げ込み、なんとか催涙ガスの発生を止めようと応援する。

こうして可能な限りの防御体制をとり、武器などは持たないまま、デモ隊は拳を突き上げて叫ぶ。民主主義を返せ！

そして銃弾を撃ち込まれると、必死で逃げる。自由を叫びながら。軍が頭部を狙って水平射撃をしようとも、決してやり返さずに。

軍は3月2日、国営紙の一面にこんな記事を掲載した。

「ミャンマー警察は、人々の暴動や抗議に対して、最小限の武力、かつ最も被害の小さい方法で対応している。警察は民主主義的に対応をしている。これは他の国よりもさらに甘いものだ」

▽絶望に耐える

3月3日。初めて鍋を叩くのが嫌になった。こんなにみんなが毎晩力いっぱい鍋を叩いて、大声で歌って「絶対に軍政は受け入れない！」「民主主義を返せ！」と声の限りに叫んでも、暴力を振るわれたらどうにもならないじゃないか！やられっぱなしじゃないか！そんなことわかっていたけど、本当にもう、嫌だ・・・。

血まみれで横たわる人。泣き叫ぶ声。燃やされるバリケード。

力任せに殴られる医療者。破壊される救急車。銃弾に倒れた人を蹴り、物のように引きずる警官。ベランダで動画を撮る市民に、容赦なく撃ち込まれる銃弾。

両手を首の後ろで組み、護送車の前に列をつくらされる大学生。

これ、外国に侵攻されてるわけじゃないんだよ。同じ国で生まれ育った、同じ言葉を話す人たちが、同じ国民にやってることなんだよ。信じられる？

そして、こんなに酷い仕打ちを受けてもなお、暴力は使えない。相手は圧倒的な武力を持っていて、その気になれば市民を皆殺しにできる。その気になるのなんて、きっと一瞬だ。

軍にとって市民の命は、もはや虫けら以下なのだ。そうでないなら、正当な理由もなく、こんな残虐行為ができるわけがない・・・。

そして私も、こうやって怒りのままに書き殴っているけれど、これだって一体何になるだろう？ミャンマーに心を寄せてくれる人がシェアしてくれて、文章がSNSの中でぐるぐる回って。

・・・それでどうなる？毎日書き続ければ、誰かひとりでも死なずに済みますか。

今日も自宅の近くで、銃声が上がった。一斉に飛び立つ鳥。数十秒おくれて、火薬の匂い。デモ隊が家の横の細い路地に飛び込んでくる。息をひそめる。そして警察が引いたのを見計らって、また路地でシュプレヒコールを上げる。声の限りに叫んでいる。

確かに彼らは負けていない。だけど・・・勝てるのだろうか？

そう思って、いやいや、と頭を振る。恐怖を植え付けられ、無力感に打ちのめされ、支配されてきたミャンマーの歴史。それを繰り返さないために闘っているんだ。

負けるもんか。負けるもんか。

◆2023年02月12日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（12）

バリケードを越えての帰宅

3月3日、ミャンマー軍や警察の残虐行為により、心が一度死んだ。でも、そんな私を再び笑顔にしてくれたのも、やっぱりミャンマーの人だった。

あの日の翌日、地方に住む友人は、電話でこんな報告をしてくれた。「今日は警察がきたらすぐに逃げられるように、バイクでデモをやったんだ。誰も傷つかなかったから、安心して。」

さらにその次の日。「今日は座りこみのデモをしたよ。途中で警察の車がきたけど、参加者の何人かが警官に交渉しに行ったんだ。僕たちは平和にやるから、撃たないで。僕たちにはデモをする権利があるはずだ、って。」

・・・そんなやり方があったのか。あまりに純粋で真っすぐで、胸が詰まる。

恐ろしくないはずはないのだ。ミャンマー全土で、クーデター以降、無抵抗の市民が何十人も撃ち殺され、何百人も刑務所に入れられたのだから。それでもミャンマー市民は、ひるまずに声を上げ続ける。自暴自棄になるのではなく、命を大切にしながら、非暴力を貫きながら。

マンダレーのデモを伝える写真には、最前線に立つ若者たちが手にする盾に「DEFENCE FORCE」（防衛隊）の文字があった。軍や警察がどんなに凄惨に武力で弾圧しようとも、自分たちは守備に徹する。そ

注

1. 民間メディア The Democratic Voice of Burma では、当日夕方5時の時点で少なくとも19人の死亡が確認された他、未確認の死亡事例が10件以上あると報道されていた。

2. 後日（4月9日）、軍の報道官ゾーミントゥンは記者会見で、軍による市民への武力弾圧について「木を育てるためには害虫は駆除されなければならない」と述べ、まさに虫けら扱いしていることを明らかにした。

西方 浩実

の強い意志を盾に記し、自らに誓いを立てているかのようだ。

女性たちもがんばっている。ヤンゴンの一部では、大通りを横切るように張られたロープに、女性用のロンジー（巻きスカート）がズラリと吊るされた。Twitterには、道をふさぐバリケードにブラジャーを山のように吊り下げる女性の写真。実はミャンマーには、女性が履いたロンジーの下をくぐったり、下着に触れたりすると男性の権威が落ちるといふ迷信がある。これを逆手にとって、権威を重んじる軍や警察に対する心理的なバリケードを張ったのだ。

女性性を「穢れ」とする男尊女卑の文化は、決して好きではないし、迷信や占いを信じるミャンマーの風習は、私には理解できないこともある。でも当の女性たちが、これを巧みに利用して平和的に抵抗の意思を示す姿は、あっぱれだ。

軍や警察の圧倒的な暴力に屈せず闘い続ける若者たちを、周囲の住民も一丸となってサポートしている。ボランティアが飲料水のボトルを配り、お昼時にはお弁当が差し入れられる。お弁当のフタには、デモ隊の安全を祈るメッセージ。

デモ隊が逃げる時に落とされた物は、脱げたサンダルからスマホのような高級品まで、ちゃんと周辺住民が保管しておいてくれるそうだ。私の自宅アパー

トでは、警察から逃れたデモ隊が路地に飛び込んでくると、セキュリティがすかさず路地に面した裏門の鍵を開け「こっちだ」と呼び込んでいる。デモが終わる時刻になると、どこからともなく無料送迎の車がやってくる。ヘルメットを緩めた若者たちが、鼻歌を歌いながら乗り込んでいく。

それぞれが、持っているものを進んで差し出すのだから、暴動や略奪など起こりようもない。かつて4年連続で世界寄付指数ランキング1位（注）を誇ったミャンマーの、面目躍如。

私の自宅周囲は、相変わらずバリケードだらけだ。出先からタクシーで自宅に戻ろうとすると、あの道もこの道も塞がれている。警官や兵士も見当たらないので「ここから歩くからいいよ」と言うけれど、運転手はなるべく近くまで行くから、と、裏道を探して走り回ってくれる。

タクシーから降りると、その辺にいたおじさんが「どこのアパート？ ああ、それならこの道を行くといい」とバリケードのない道を教えてくれる。ドラクエの親切な村人みたいだな、と思わず笑ってしまう。

国軍による暴力や不当な逮捕は、今日も続いている。ミャンマーは平和です、とは決して言えないのだけれど、平和を愛するミャンマー人たちのおかげで、私は今日も元気に暮らしています。

▽深夜の銃乱射

夜8時から戒厳令のミャンマー。毎晩ほとんどぴったり8時にカンカンカン・・・と鍋叩きの音が聞こえ始めるので「あ、8時だ」と、もはや時報のような感覚になっている。ひとしきり鍋を叩き終わると、反軍政のシュプレヒコールを叫び、民主化の歌を歌う。

毎日、誰よりも張り切って叫んでいるかわいい声は、民主主義の意味などわからないであろう小さな子どもたちだ。街中みんなで叫ぶこのイベントを、きっと毎晩楽しみにしているんだろう。

そのあとは、棒を手にした自警団の住民を路上に残し、街はしいんと静まり返る。夜中はあまりに物音がしないので、自警団たちの話し声が丸聞こえになり、どこかで警察に聞きつけられやしないかとひそかにヒヤヒヤしている。

しかし3月7日、夜10時頃。街が静まり返る中、自宅で知人と電話をしていた私の耳に、パン、パン、と連続で発砲音が聞こえた。・・・え？うそでしょ、今？・・・音は少し遠い。だけど間違いのない、銃声だ。デモもないこんな静かな夜に、なぜ・・・？心拍数が上がる。ごめん、と急いで電話を切る。

確かに前夜から、ヤンゴンに緊迫した状態にあった。戒厳令で人々が外出できない夜の中に、警官や兵士が大人数で民間人の家に押し入り、地区のリーダーや議員などを何人も連行したのだ。（そのうちの1人は翌朝、血まみれの遺体となって帰ってきた。）

だから、夜が危険なのはわかっていたけれど、実際にこんなに静まり返った夜中に銃声が聞こえると、軍は一体どこで何をしようとしているのか、と嫌な想像と不安でいっぱいになる。

30分後。なんとなく落ち着かないまま寝る支度をしていると、すぐそこからパン！パン！パン！と連続で銃声がした。条件反射で窓に目をやると、外の暗闇が、発砲音に合わせてピカッピカッと赤く染まっている。えっ、うそ、と思わず声が出る。その後もたて続けに響く銃声に、思わず「ひゃあ」と情けない声をあげてしまう。

ベランダから外の様子を確かめようと思いかけて、いや待てよ、と思ひ直す。銃声はものすごく近かった。外に出ちゃダメだ。そっと寝室の窓に近づき、こわごわと外を見下ろす。いつの間にか街灯はすべて消され、あたりは真っ暗だ。夜闇の中、すぐ横の路地にトラックのような車の影。警察車両だろう。

路地に面した台所に回る。あろうことが電気がつけっぱなしになっている。思わず舌打ちをし、急いで電気を消す。そして窓から少し離れた位置から、そっと路地を見下ろす。十数人の警官たちが、何発も執拗に発砲している。ものが壊れるような音はしないので、威嚇射撃なのだろう。警官たちのうしろには警察のトラックが3台、闇に紛れてじっとしている。地中から響いてくるような、低いエンジン音。気味が悪い。

そこらじゅうのアパートの壁を、警官が手にした懐中電灯の光が這う。何かを探しているのか。私が息を潜めている台所の窓も、一瞬かすめて、通過していく光。

私は毎日この台所から路地を見下ろしながら、夜中に警官や兵士が来たら鍋を叩いてやるんだ！なんて思っていた。でも、ぜんぜん無理だ。怖い。こんな脅しにビビって、動揺している自分が悔しい。・・・悔しいけれど、震えるほど怖い。

相手が銃を持っているって、こんなに圧倒的なんだ。警官や兵士に銃口を向けられながら、毎日叫び続けているデモ隊は、どれほど怖い思いをしているんだろう。そして、どれほどまでに自由を切望しているんだろう。今さらのように思い知る。

翌朝9時、午前1時からのインターネット遮断が終わると、Facebookには昨夜の様子が続々と投稿されていた。昨夜は、ヤンゴン中のあらゆる場所で警官隊が銃を撃ちまくったようだった。映像には、静まり返った街をうろつき発砲する警官の様子が映されている。

そうした無数の映像に紛れて、なぜか夜空に花火が上がっている映像。再生してみると、銃声につづ

き、なんと勇敢にも花火を打上げている人がいる。

「Happy New Year!!」と叫ぶ声が重なる。・・・ああ、なるほど。確かにこのパン！パン！パン！と連続する銃声は、ミャンマーのお正月（4月）に鳴る、花火や爆竹の音に似ている。

・・・すごいな。思わず笑ってしまう。Freedom from Fear. 銃声だって、これでもう怖くない。まったく理不尽な暴力に対して、どこまでも平和に返すミャンマー人。この人たちには本当になかなかないな、と思う。

注

イギリスのCharities Aid Foundationが2010年から発表している、人助け・寄付・ボランティアに関する指数World Giving Indexにおいて、ミャンマーは2014年から2017年にかけて4年連続1位を獲得している。

